

知識人の肖像——夏目漱石『行人』試論

石原千秋

はじめに

漱石文学の主人公たちは近代知識人と言っている。ある時期までの漱石研究では、漱石文学は近代知識人の苦悩をテーマとした文学として論じられてきた。いまは「近代男性知識人の苦悩をテーマとした文学」という程度の修正が必要だが、京都帝国大学中退の『門』の野中宗助を例外として、彼らは東京帝国大学の卒業生である。制度的に近代知識人だったが、それだけが近代知識人のあかしだろうか。

京都帝国大学と東北帝国大学に数名の女性が入学して卒業した記録はあるが、東京と奈良の二校の女子高等師範学校を例外として、一般に女性の高等教育機関はなかった。高等女学校は、男性しか入れない中学と同格だった。明治初期に作られたミッシン系の女学校はしだいに「色もの」的な扱いになり、文部科学省は「学校で宗教行事を行ってはならない」というお達しによって、実質的にミッシン系の女学校を排除しようとした。そこで、明治三〇年代以降の女学校は家政と遊芸を中心とした「嫁入り修行」のための学校になった。英語を学ぶ漱石文学の女性主人公たちは、明治三〇年代にミッシン系の女学校を出た女性だと思われるが、高等教育を受けたとは言えない。

したがって、「近代知識人の苦悩をテーマとした文学」と言うとき、

女性はその中にはいない。これは制度上の差別であって、漱石の差別ではないと言いたいところだが、津田由雄の「人格」を問題にした妹のお秀を「高が女学校を卒業した位で、そんな言葉を己の前で人並みに使うからして不都合だ」（『明暗』百二）とさげすむ津田由雄を書く『明暗』の漱石を知ると、微妙かもしれない。しかし、漱石文学の女性主人公たちは「女の謎」をもつて男性知識人を操っているとまでは言えないが、少なくとも振り回しているとは言えるだろう。そうした論の端緒を開いたのは「二郎説話」として有名な、長野二郎と長野直の恋を読み込んだ伊豆利彦のすぐれた『行人』論である。⁽²⁾しかし、再び長野一郎と長野二郎という知識人の物語として読んでみたい。それには、物語論によって二郎を正しく行為者としなければならないだろう。『行人』とは、そもそも二人の知識人の闘争の物語ではなかっただろうか。

一 長野一郎と長野二郎は二人で一人

夏目漱石は、初期から二人の主人公を組み合わせて小説を書いていった。『坊っちゃん』でも、「おれ」と山嵐の組み合わせである。特に後期三部作と呼ばれる『彼岸過迄』『行人』『こころ』では、考える主人公（彼らが近代知識人と呼ばれたわけだ）とそれを観察して行動する主人

公によって構成されている。『行人』はさらにHさんが加わる。

Hさんは旅行中の兄一郎の様子について報告を依頼した二郎のことも、一郎の妻である直のことも詳しく知るはずはない。Hさんが二郎の依頼を引き受けたのは、彼も一郎に不安を感じており、さらにはその原因が家族にありはしないかと疑っていたからではないだろうか。Hさんが旅行中に見た物語は一郎一人の身の上起きたものだが、二郎はそれにさらに手記を書く行為によって物語をつけ加えたことになりはしないだろうか。知識人長野一郎像は、二郎とHさんとの共作だとは言えないだろうか。

物語の主人公とは何だろうか。物語とは因果関係によって区切られた言説である。因果関係とは直進する時間のある時点で起きたことを「原因」と見なし、その後起きたある出来事を「結果」と見なす思想によって成り立っている。したがって、因果関係は直進する時間に組み込まれているのではなく、多くの場合「結果」の大きさに注目して、それ以前に起きた出来事を「原因」とするある思想的な枠組みが作り出すものだ。しかも黒崎宏によるなら、「原因」として何を挙げるとかは、客観的に決まっているわけではない、という事を物語っている。「原因」として何を挙げるかは、基本的には、それにかかわる人間の問題意識に依存するのである⁽³⁾（ゴチック体原文）。因果関係はそれを記述する人間の立場に左右される。

このようにして鉛のように延びきった時間を切断してその断面を因果関係で新たに縫い合わせたとき、そこに因果関係を設定した、「内面」と呼んでもいいような厚みを持った主体が立ち上がってくる。そのような思想と力を持った人物が主人公に見えるのではないだろうか。フーコー流に言えば、主体化するのは社会の規範を内面化することだが、人間の主体はただ受け身ばかりではない。世界を自分の時間軸に

よって内面化する力が、人間を人間たらしめている。もちろん、その力を働かせる主体は社会を内面化した結果形成されたものでもある。その意味で、「内面」と世界とは相互的な関係にある。

歴史記述に関して言えば、何を「原因」として挙げるかは歴史記述者の歴史観の問題になる。それを真つ当な歴史観と判断するかどうかは、ある地域のある時代のパラダイムの問題である。歴史の記述が「歴史」として認識されるか否かは、地域や時代のパラダイムに左右されるのである。

現代ではロトマンというソ連時代の文学理論家の説に従って、主人公とは〈ある領域から別の領域へ移動する人物〉だとする説明が一般的⁽⁴⁾だろう。たとえば、NHKの「連続テレビ小説」は〈少女から女へと移動（成長）する人物〉を数十年繰り返して放映している。これが、ロトマンの言う主人公の典型である。ここでは、このように〈ある領域から別の領域へ移動する人物〉を「物語的主人公」と限定的に呼ぶことを提案したい。

漱石文学にはもう一つの主人公の型があるからだ。それは〈について考える人物〉である。こうした〈について考える人物〉の典型が漱石文学後期三部作の近代的知識人と呼ばれてきた主人公たちで、須永市蔵（彼岸過迄）、長野一郎（行人）、「先生」（こころ）である。こうした人物を「小説的主人公」と呼ぶことを提案したい。これこそが漱石的主人公なのである。「物語的主人公」⇔変化する主人公、「小説的主人公」⇔思索的主人公と言えはわかりやすいかもしれない。

文学は因果律の転倒を好んで用いる。江戸川乱歩『屋根裏の散歩者』を例に考えよう。

主人公の郷田三郎は、素人探偵の明智小五郎と知り合って話を聞くうちに犯罪に興味を抱く。郷田はひょんなことから自分の住んでいる

下宿屋の屋根裏に入り込み、他の下宿人をのぞき見て歩く密かな楽しみを覚えて、ついには屋根裏から毒薬を垂らしてそのうちの一人、気に入らない遠藤を殺してしまう。完全犯罪に思われたが、結局は明智小五郎に見破られるのだった。

この構成を三つに整理しよう。

- ① 郷田三郎は素人探偵の明智小五郎と知り合った。(動機)
- ② 郷田三郎は遠藤を殺した。(犯行)
- ③ 郷田三郎の殺人が明智小五郎に見破られた。(解決)

都市社会学風に説明するなら、都市で孤立していた郷田三郎が殺人によって明智小五郎に探してもらいたかった、すなわち自分の存在を認めてもらいたかったとでもなるだろうか。事実、こういう自己承認願望の動機による殺人はいまでも都会で起きている。これは郷田三郎を主人公にした説明だ。ひっくり返そう。明智小五郎を主人公にするのである。

- ① 明智小五郎は郷田三郎に殺人を唆した。(動機)
- ② 郷田三郎は遠藤を殺した。(犯行)
- ③ 明智は郷田三郎の殺人を見破った。(解決)

この説明だと、淋しくて自己承認願望があり、探してもらいたかったのは明智小五郎の方だったことになる。郷田三郎と明智小五郎の、物語上の因果性はひっくり返せるのである。

ここで問題となるのは、偶然や可能世界だろう。偶然や可能世界を排除して、歴史記述はできるのだろうか。歴史でも「〜は〜である」

というとき、「〜でなかったら」という問いかけが隠されている。この点に関して、竹内啓はこう書いている⁽⁵⁾。

歴史の必然とは、ある事件Aと先行する事件B（あるいはその時の状況X）との結びつきが必然であること、つまりBが起これば（あるいはXのもとでは）必ずAが起ることを意味する。もしBが起こつても（あるいはXのもとでも）、必ずAが起ることは限らないならば、その結びつきは偶然である。

実際に歴史上でBが起こり、続いてAが起こつたとき、「Aが起こらないこともあり得た」と想像することは、歴史上の事実に対することを想定することである。それは学問的な歴史において「歴史のもし」つまり歴史上の事件が事実と違っていたらと想像することは許されない、という要求に反することになるかもしれない。

しかしもしこの要求を厳格に守るとすれば、歴史における「因果関係」を論じることが許されなくなる。「BがAの原因であった」と述べることは、「もしBが起こらなかったらAは起こらなかったであろう」ということを意味しているはずだからである。

竹内啓はこれは極論だと言う。しかし、極論どころか思考にとつては「あたりまえ」ではないだろうか。ある事物に対して「なぜ？」とプロットの疑問を持ったときには、「そうではない」可能世界が裏側に張り付いている。「漱石は小説家である」という記述は、「漱石は小説家ではない」という可能世界が想定できていなければ意味をなさないからである。歴史は可能世界によって記述可能になっている。必然と偶然がコインの裏表の関係にあるように。

もっとも、文学の場合、主人公（と読者）が作り出した因果関係が

どういう思想によっているかは、たいていの場合とてもわかりにくい。それは物語の構成上、主人公の作り出した因果関係が「自然」に見えるからである。逆に言えば、「自然」に見える因果関係は物語の構成に見合っているように見えるからだ。そこに、「自然」に見える因果関係の作り方の面白さがある。そうだとすれば、物語それ自体がどのような思想によって物語として成立しているのか、それ自体もとてもわかりにくいことになる。実は、これが文学の面白さだ。

『行人』では長野一郎が小説的主人公、長野二郎が物語的主人公だと言った。二人とも東京帝国大学の卒業生であって近代知識人という重荷を背負っている。そして一郎の「神経」に二人とも悩まされている。その意味では、二人で一人なのである。

これを『屋根裏の散歩者』の構図に当てはめてみよう。

①長野一郎は妻のお直が弟の長野二郎に恋していると思った。

(動機)

②長野一郎は長野二郎にお直の節操を試すように長野二郎に命じた。

(犯行)

③長野二郎は長野家を出た。(解決)

淋しさという言葉を使うなら、淋しかったのは一郎だと言える。しかし、手記を書いているのは二郎だった。彼は観察し続けてもいたのだ。二郎を主人公にできるだろうか。

①長野二郎は長野一郎の嫉妬心を煽った。(動機)

②長野二郎は長野一郎を日さんと旅行に行かせた。(犯行)

③長野二郎は手記で長野一郎の恐れの原因を暴いた。(解決)

二郎の手記はこういう構成になっている。(一郎の近代知識人の孤独→二郎の敬意と嫉妬→二郎の行動としての物語)。淋しかったのは二郎だったのではないだろうか。

長野家を出た二郎を父が訪ねて、食事に誘ってから、長野の家に伴った。ひさしぶりに長野の家を訪った二郎は、「凡てが出るときと趣を異にしていた。凡てが下宿とも趣を異にしていた」(「塵労」十)と感じた。彼はもう長野家の外の人間になったのだ。二郎は続けてこう書いている。

自分はこういう過去の記念のなかに坐って、久し振りに父や母や妹や嫂と一所に話をした。家族のうちで其処にいないのは唯兄だけであつた。その兄の名は先刻からまだ一度も誰の会話にも上らなかった。自分はその日彼がKさんの披露宴会に呼ばれたという事を聞いた。自分は彼がその招待に応じたが、上野へ出掛けたか、果して留守であるかさえ知らなかった。自分は彼が自分の前にいる嫂を見て、彼女が披露の席に臨まないという事実だけを確かめた。

自分は兄の名が話題に上らないのを苦にした。同時に彼の名が出て来るのを憚った。そうした心得でみんなの顔を見ると、無邪気な顔は一つもないように思えた。(傍線石原、以下同様)

これほど残酷で無慈悲な記述はめったにないだろう。二郎はいまや自分が長野家の外の人間だと知りながら、もう一人、自分より外にいる人間がいるというのだ。そのためにここでは「自分」を家族の中に数えている。そして二郎は、ジョナサン・クレリーが言うような、

観察者が世界の外に在るとがでなくなった一九世紀のパラダイム・シフトなどなかったかのように、家族の外の冷徹な観察者として振舞っている。それでも、二郎は「自分」の強度を試すかのように、「自分は」と何度も繰り返す。『行人』ほど「自分」が溢れている小説も珍しい。彼は極外の観察者であり、同時に極内の人間なのである。その二面性をこの「自分」という再帰的一人称が支えている。二郎はなぜそんなことができたのだろうか。

先の「一家団欒」のあとに、長野二郎は妹のお重に譲ったかつての自分の部屋に行くと、「果たして後から随いて来た」お重は、兄の長野一郎からテレパシー研究の実験台にされたことを話し、気味悪がった。この時代にはテレパシーがかなり流行っていたことについては一柳廣孝が詳細な研究を行っているが、お重から「気味が悪い」と言われる程度には一般的ではなかったようだ。研究としてもある種際物だった。心が通じ合わない一郎の苦悩がそれほどまでに彼自身を苦しめていることが、二郎にもはつきりわかった。だから、先の「家族団欒」の様子が記述できたのである。一郎を「気味が悪い」と思っているのは自分だけではない、と。

これが、二郎が手記を書く行動に出る契機となったのではないだろうか。

二 近代知識人に見えること、見せること

長野家で一郎が特別な存在である理由は、二郎によってこう説明されている。

兄は学者であつた。又見識家であつた。その上詩人らしい純粹

な氣質を持つて生まれた好い男であつた。けれども長男だけに何処か我儘な所を具えていた。自分から云うと、ふつうの長男よりは、だいぶ甘やかされて育つたとしか見えなかつた。自分ばかりではない、母や嫂に対しても、機嫌の好い時は馬鹿に好いが、一旦旋毛が曲がり出すと、幾日でも苦い顔をして、わざと口を利かずにいた。(兄)六

うっかりこう書いたのであれば(もちろん、「うっかり」書いたとしてもテクストにおける意味は他の言葉と少しも変わらないが)、一郎が「わざと口を利かずにいた」と二郎にわかっているのはなぜだろうか。この引用部では、理由は二つあると、二郎は観察している。一つは学者であること、もう一つは長男として甘やかされすぎたこと。

「二郎、学者つてものは皆なあんな偏屈なものかね」

(「帰ってから」二十)

一郎を育てた母は自分が甘やかすぎたという認識がないのか、東京帝国大学を出ている二郎には「学者」がどういふものかわかるだろうと思つて、こう質問するのである。この質問とHさんの手紙とが、長野一郎の「偏屈」な性格は「学者」ゆえだということに仕立て上げるのではないだろうか。なんどでも繰り返すが、こう書いたのは長野二郎である。

『図説 中世ヨーロッパの城』(ふくろうの本、河出書房新社、二〇二五・八)という著作を持つ、フランス中世・近世史が専門の堀越宏一は、ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』を読んだことが契機となって、歴史には「類似の事例」が多いことから、歴史学に実証主義

ではなく、「〴〵のように見える」という概念が導入できないかと考えるようになったと言う^⑨。

たとえば、中世ヨーロッパの城を例にこう述べている。——中世ヨーロッパでは「一〇世紀末にヨーロッパの城が誕生した時から一二世紀まで城の中心は城壁に囲まれた中央に鎮座する天守塔」があったのは、そこが「一番安全な場所であり、城主一家が立て籠もる場所だった」からだが、「その一方で、そこから敵に反撃することがほとんどできない天守閣は城の防衛の役には立たなかった」ことが明らかになって「無用の長物」になった。ところがそれ以後も、城には「天守塔のように見える」建物が建て続けられており、デイズニーランドのシンデレラ城はその典型だと言うのだ。

堀越氏は城の定義を考えているうちに、「〴〵のように見える」ことの重要性に気づいたと言う。なるほど、ウィトゲンシュタインは物事の「定義」や「説明」などではせず、できるのは「例」をあげることだけと言っている^⑩。だとすれば、私たちが「定義」だと思っていることは、「〴〵のように見える」事例の集成なのかもしれない。その事例が意思を持つ「人」だったら、「〴〵のように見える」だけでなく「〴〵のように見せる」ことも事例に加えなければならないだろう。一郎が「わざと口を利かずにいた」のは、「〴〵のように見せる」事例だったのではないだろうか。二郎にはおそらくそれがわかっていて。

一九二一年に刊行された医学博士・小酒井不木『学者気質^⑪』には、「学者」には「専門文科の弊」があり、自分の専門以外のことには「知識もなければ興味もない」ような「動もすると常識の乏しい学者を作り易い」とある。「日本のある解剖学者が日清戦争を知らなかったのは有名な話」という事例を挙げている。俗に言う「専門バカ」である。学者については「学問研究に必要な事項として、熟練、忍耐、幸運、

金の四つを挙げて居る」と書いてる。

いまでもドラマにでてくる学者は浮世離れた人物に描かれるが、この時代にはすでに学者がこういうふう典型化されていたようだ。長野一郎もいくぶんかこういう典型例のような気味あいがある。彼の「偏屈」な性格は、中世ヨーロッパの城に建てられて天守閣のようなものかもしれない。「偏屈」な性格が、家族に彼を学者のように見せていることはまちがいない。

Hさんは、手紙にこう書いてる。

兄さんの苦しむのは、兄さんが何をどうしても、それがエンド目的にならないばかりでなく、方便にもならないと思うからです。ただ不安なのです。従って凝としてられないのです。兄さんは落ち着いて寝てられないから起きると云います。起きると、ただ起きていられないから歩くと云います。歩くとただ歩いてはられないから走ると云います。既に走け出した以上、何処まで行っても止まれないと云います。止まれないばかりなら好いが刻一刻と速力を増して行かなければならないと云います。その極端を想像すると恐ろしいと云います。冷汗が出るように恐ろしいと云います。怖くて怖くて堪らないと云います。(『塵勞』三十二)

Hさんが二郎との関係で一郎を「兄さん」と呼ぶのは、一郎が長野家の家族だと強調したいからだ確認しておきたい。つまり、一郎は家族から見れば他人であり、他人から見れば長野家の家族なのである。しかし、一郎はそのどちらでもない。

これを物語の観点から見ると先に『屋根裏の散歩者』の構図に当てはめるなら、一郎の物語には②の犯行Ⅱ過程と③の解決Ⅱ目的は

あるが、①の動機が明確ではないことが見えてくる。⁽¹²⁾ 一郎には自分がなぜそうしているのか、その理由がわからないのだ。彼の生は因果関係で説明できないのである。もちろん、誰の生も因果関係では説明できるはずはない。しかし、人は自分の生に因果関係を求めて、それに「運命」という名を与えて、自分の生に意味を求めて安心するものではないだろうか。それが、一郎にはない。

一郎は、さらにこう言ったらしい。

「人間の不安は科学の発展から来る。進んで止まる事を知らない科学は、かつて我々に止まる事を許して呉れたことがない。徒歩から俥、俥から馬車、馬車から汽車、汽車から自動車、それから飛行船、それから飛行機と、何処まで行っても休ませて呉れない。何処まで伴れて行かれるか分からない。実に恐ろしい」(同三十二)

一郎は科学を人間の外部にあるかのように語っている。しかし、科学は人間の営みなのだ。科学は人間の内部でもあり外部でもある。これが、人間が「さまざまなコンヴェンション約束事や境界のシステムに埋め込まれた存在」(『観察者の系譜』)でしかないという意味である。長野一郎の恐怖は科学による速さへの恐怖である。

現代という時代は「できるだけ多くの情報を、できるだけ遠くに、できるだけ速く運ぶこと」を明確に目標に定め、その成功によって作り上げられた。速度をもつとも必要としたのは戦争である。ポール・ヴィリオリは戦争論の中でこう言っている。「西欧の人間が到底多いとは言えない人口にもかかわらず優越性を持ち支配的であるように見えたのは、より速い者として現れた」からで、わけてもイギリスの優位性が確立したのは「産業革命」ではなく「速度の革命」が、民主主義では

なく速度体制が、戦略ではなく速度術が存在した」からだ⁽¹³⁾。オルテガ・イ・ガセットはこう言っている。⁽¹⁴⁾ 「イギリス民族は、常に未来を先取りし、ほとんどすべての領域にわたって一番乗りをしてきた民族なのだ」と。近代日本がイギリスから学んだのもこのことだった。これが一郎があれほどまでに科学と速度を恐れる理由ではないだろうか。一郎は現代の速度から降りようとしている。そこで彼は孤独に陥るが、それは近代に生きながらその知性によってあたかも神のような超越的な視点の位置に立つてしまったからではないだろうか。フェイ・バウンド・アルバーティは「孤独は定義するのが難しい。孤独の対義語は存在せず、完全に主観的なものである」というが、個人は自律していなければ孤独はやってこないことだろう。「孤独は近代の疫病」と言うゆえんだ。しかも、「イギリスは『ヨーロッパにおける孤独の首都』だとも言う」⁽¹⁵⁾。

一郎は長野家において特別な存在だった。その理由は長男だったからだ⁽¹⁶⁾と述べられていることはすでに確認した。それは、趣味(ハビトゥス)の継承⁽¹⁷⁾相続によって示されるものだった。

母の遠縁に当たる岡田が長野家から学校に高等商業学校を出て関西で就職するとき、父は岡田に掛け軸を贈ったが、二郎が訪れるとそれは「反っくり返っていた」(『友達』二)から、父の血縁でないだけでなく、趣味がないゆえに継承者として脱落する。

一郎はかつて大阪の街で見た光景を、宿に帰ってから話しはじめた。それを聞く資格のあるのは家族の中で二郎だけだった。

「何だか水滸伝のような趣じゃありませんか」

「その時からしてが既に縹渺たるものさ。今日になって回顧する
とまるで夢のようだ」

兄はこんな事を回想するのが好きであった。そうしてそれは母にも嫂にも通じない。ただ父と自分だけに解る趣であった。

〔兄〕三

父の趣味の継承者＝相続人からは女性はずされて、長野一郎と長野二郎が有資格者として残った。しかし――。

兄はその大広間に仮の仕切りとして立てあつた六枚折りの屏風を黙って見ていた。彼はこういうものに対して、父の薰陶から来た一種の鑑賞力を有つていた。その屏風は妙にべろべろした葉の竹が巧に描かれていた。〔兄〕十二

ついに、父の趣味の継承者＝相続人としては長野一郎だけが残った。長野家の関西旅行は、長野家の相続人が誰かを改めて確認する行事となつたのである。明治民法では、相続人である長男が家族に含まれるのかどうか、明確な規定はない。さらに言えば、一郎の「知性」は、東京帝国大学を出た二郎には届かないだけでなく、専門がちがうとは言え、同じ東京帝国大学の教授であるHさんでさえ及びもつかないようだ。

Hさんは書いている。

兄さんの頭は明らか過ぎて、ややともすると自分を置き去りにして先に行きたがります。心の他の道具が彼の理知と歩調を一つにして前へ進めない所に、兄さんの苦痛があるのです。

〔塵勞〕四十六

一郎の「頭」は彼自身をも置き去りにするらしい。すなわち、一郎は観察者としても家族としても、あたかも神であるかのように絶対的な孤独者なのである。あえて言えば、この手記の書き方によつてそう見えるように仕組んだのは二郎である。ごく少数の例外を除いて、漱石文学の近代知識人は西洋趣味を見せびらかして、それゆえに自分は孤独なのだと見えるように生きている。

『行人』には、唯一孤独からのがれる方法が書き込まれている。呼びかけても来ないと、山に向かつてスタスタ歩いて行つたモハメッドの例ではない。

「先刻君は蟹を所有していたじゃないか」

私が兄さんに突然こう云い掛けますと、兄さんは珍しくあははと声を立てて愉快そうに笑いました。(中略)

「つまり蟹に見惚れて、自分を忘れるのさ。自分と対象とがぴたりと合えば、君の云う通りになるじゃないか」〔塵勞〕四十八

「所有」とは資本主義を成り立たせている原理である。Hさんは「所有」とはどういうことをわかりやすく説明しているが、それはどういう意味を持つのだろうか。

ここからあそこへゆくということは、そのときあそこはここになり、ここはあそこになるということです。われわれは、たえず自分のいまいるここを脱出してあそこへ行き、いまの向きを脱出して、反対の向きになる。私は皆さんを見たときに、皆さんにとつては、私のいる方向が前だということをとらえている。だからいい方をかえれば、脱中心化とは他者の立場に身を置くということ

にほかならない。人の身になってみるというのは、単に空間だけの問題ではなくて、他の主体の立場になってみるということをも含んでいますから、脱中心化は同時に他者理解の基盤でもある。¹⁶

(傍点原文)

後半は道徳臭さを無視すれば、これは資本主義を成立させている原理そのものである。こうした他者理解を経た道徳と資本主義の原理とはコインの裏表の関係にあることがわかる。「ここ」から「あそこ」の立場に立って他者を理解して思いやって自制せよと説く道徳も、「ここ」から「あそこ」を憧れ嫉妬して欲望して「あそこ」に行きたいと思うことも、「ほしい」が根本にあるからだ。道徳と欲望はまさにコインの裏表の関係にある。資本主義化下の道徳は資本主義の形をしているのである。

長い間近代を拘束してきた立身出世という物語も、「ほしい」が根柢にある。福沢諭吉『学問のすゝめ』は「ほしい」を実現する方法を説いていた。近代は欲望の肯定から成り立っていた。たとえば資本主義の申し子であるファッションは、「ここ」から「あそこ」に行きたい視覚的な欲望が成り立たせている。

長野一郎を救うにはどうすればよかったのだろうか。「蟹を所有」するのは難しそうだが、買い物ならできる。京都帝国大学中退で文人趣味もない、漱石文学の近代知識人としては落第生としか言えない『門』の野中宗助は、小説の冒頭近く、達磨の風船を買ってくる。こういう買い物をする一郎は想像もできない。「ほしい」を懷に抱えてたとえば日用品の買い物をしている長野一郎！ それくらい近代知識人のように見えない姿はめつたにないだろう。

次に引用するのは、岩井克人『貨幣論』（ちくま学芸文庫、一九九八・三

の一節である。¹⁷

貨幣を貨幣として今ここでひきうけてもらうためには、貨幣を貨幣として引き受けられてくれる人間が無限の未来まで存在しつづけることが期待されなければならない。無限の未来にむけての期待のみが、今ここの貨幣の貨幣としての価値を支えている。(中略) 貨幣をさしだして商品を買うこと——それは、貨幣にまさに無限の未来にむけての「命がけの跳躍」を強いることなのである。

マルクスは商品が売れることを「命がけの跳躍」だと言った。いかなる価格で売れるのかは買い手しだいで、商品はそれを待つしかないからである。しかし、貨幣論からみれば、買い手こそが「命がけの跳躍」を強いられると言うのである。それはこういうことだ。

商品にとっていつ自分が買われるかは偶然に任せるしかない。しかし、買い手にとってはその商品を買うのは自分自身の主体をかけた選択の結果である。なぜ買ったのかという必然性が問われる。その主体がいつまでも買い手の必然的な選択であるための条件を保証するのは、無限の未来においても自分の主体が自分の主体であるという未来にむけての期待しかない。それが、買い手の主体である。

だとすれば、商品を買うとき、主体が問われるのは買い手の側である。買い手が、自ら商品を買った必然性を問い続けなければならない理由はここにある。自己同一性という神話に取り憑かれた近代人は、この悪夢を生き続けるしかない。これと同じことが、「自分」という主語についても言える。

後期三部作を特徴づけているのは、手紙と話すことである。「私は」

と言葉にすることである。ここで反転が起きる。大橋洋一はジャック・ラカンのシェーマ¹に関連してこう言っている。

たとえば文の主語 (Subject) と語る主体 (Subject) との混同の問題。わたしは自分がどういう人間なのか、ほんとうはわかっていません。これは誰でも同じでしょう。しかし自分のことを「わたし」と語ること、ほんとうは曖昧模糊として矛盾をいっばいかかえているはずのわたしが、なにかまとまりをもった統一的自我の持ち主とさえ思えてくるとしたら、まさに鏡像を自分の姿と認識した幼児とまったく同じ精神構造にとらわれているわけです。「わたし」という言葉は、わたしの本来の姿を隠し、わたしを充実した統一した主体にみせかける。そしてそのときわたしは言語の秩序という他者の領域に従属している事になるのです。

〔新文学入門〕岩波書店、一九九五年

このあと大橋洋一はラカンを踏まえて説明を展開するのだが、この一節には違った意味づけができる。

「自分は」と「自分」を主語にして語ったとき、人は「自分は」というときの「は」という助詞で自分と他者とを切り分けている。その上で、「自分」という主体を他者に差し出している。その時何が起きているのか。「自分」はその発言内容によって自らを輪郭付け、一方で他者に意味づけられているのだ。文の主語は、語る主体と、それを読み、聞く他者とが出会い混じり合う場である。

語る主体は言葉の意味が結ばれる地点から逆に主体を輪郭づけるが、それがどこかは偶然に任せるしかない。読み、聞く他者は、「命がけの跳躍」を経て、「自分」から意味を買う。その他者は「自分」

に対して常に未来にある。「自分」という主語は「自分」という主体を統合しない。拡散し続けるのだ。いや、漱石的主人公が「自分」と語ったとき、偶然に身を任せ、未来を信じているはずである。一郎にできないのはこういうことだ。

一郎は近代知識人としてメタレベルで思考することを強いられている。その一郎が日用品を買ったら日常世界と対話をしたことになる。いや、日用品は買わないが、「蟹を所有」していた。それはメタレベルとオブジェクトレベルとが結びついた絶対矛盾的自己同一と言えるだろう。二郎が書いた手記は、まさに一郎を絶対矛盾的自己同一に陥れたのである。それが二郎がしたことなのだ。¹⁸⁾

注

- (1) 漱石文学には安定した本文がないので、この論文では新潮文庫を用いる。
- (2) 伊豆利彦「『行人』論の前提」『日本文学』一九六九・三。なお、漱石的主人公の「恐れ」に関しては「『先生』は何を恐れているのか―夏目漱石『ころ』論―」(『日本病跡学雑誌』第106号、二〇二三・一二)などで論じた。
- (3) 黒崎宏「ワイトゲンシュタインから道元へ」哲学書房、二〇〇三・三。
- (4) ロトマン「文学と文化記号論」磯谷孝編訳、岩波書店、一九七九・一。
- (5) 竹内啓「偶然とは何か―その積極的意味」岩波新書、二〇一〇・九。
- (6) ジョナサン・クレリー『観察者の系譜 視覚空間の変容とモダニティ』遠藤知巳 訳、十月社、一九九七・一一。
- (7) 現在、私は漱石文学と一人称の関係について考えはじめている。(漱石研究者には、私の漱石文学研究のテーマはずっとそうだったと言われた。)ある精神科医の話では、現在の不安定な世界情勢を反映して、欧米では鬱が広まっていると言う。それは一人称を引き受けられないという形を取る。そこで、精神医学ではコ・クリエティブ交流分析が認められつつある(バーニー・ネヴィル、キース・チュダー「エコセントード・セラピー」命のプロセスを支えるパーソンセントード心理学の新たな地平」門本泉監訳、日本評論社、二〇二五・九)。これはAとBとが会話をするとき、その主体はAの側にもBの側にもなく、AとBと対話の場に主体が「ある」と考える。ポストモダンの時代に、「あいだ」という概念で人間関係を捉えようとした木村敏

を知っている私たちには理解しやすい分析方法である。

- (8) テレパシーと心の問題系に関しては、一柳廣孝『無意識という物語 近代日本と「心」の行方』（名古屋大学出版会、二〇一四・五）、『催眠術の日本近代』（法蔵館文庫、二〇二五・九）などに多くを学んだ。
- (9) 堀越宏一「『…のように見える』ことを歴史の研究に活かす」『史學雜誌』第131編第1号、二〇二二・一。
- (10) 先に挙げた黒崎宏は、成城大学文学研究科長時代に、教授会で研究科長として説明を求められた時、「説明はできない、例を挙げることはできない」とおだやかな口調で答えた。里崎宏はウイトゲンシュタイン研究者ではない。ウイトゲンシュタインを生きたのである。
- (11) 小酒井不木『学者気質』落陽社、一九二一・一二。
- (12) 漱石が「父母未生以前の本来の面目」にこだわったことを確認しておきたい。
- (13) ポール・ヴィリリオ『速度と政治』市田良彦訳、平凡社、一九八九・二。
- (14) オルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』佐々木孝訳、岩波文庫、二〇二〇・四。
- (15) フェイ・バウンド・アルバーティ『私たちはいつから「孤独」になったの

か』神崎朗子訳、みずす書房、二〇二三・一一。

- (16) 市川浩『〈身〉の構造』青土社、一九八四・一。
- (17) 『貨幣論』ちくま学芸文庫、一九九八・三。
- (18) 何かを買うことの意味については「高度経済成長とバブル期と文学研究」『物語研究』第二十二号、二〇二二・三で論じた。漱石文学と「所有」「絶対矛盾的自己同一」に関しては別稿を準備中である。

少し長い付記

花崎育代さんは、若いときに日本近代文学会の運営員をした仲間です。花崎さんも私もこの三月に定年退職を迎えます。感無量です。

この試論は「くように見える」というアイデアを応用したのですが、まさに試論の段階です。また、あまりに多い『行人』論はあまり参照しないで書きました。もし本に入れる機会があれば、その時に「注」を付すことをお断りします。

本論は学術研究助成基金助成金・課題番号25K03832の成果の一部である。

（早稲田大学教授）

